

ボランティア情報

2024

2月号
no.561

～つながる、広がる、福祉教育～

福祉教育 わたしたちの実践

埼玉県 吉見町社会福祉協議会 地域福祉係長 一場 千尋さん



【地域の4市町社協が目的を一つにし、切磋琢磨して取り組む福祉教育】

吉見町社会福祉協議会（以下、町社協）では、近隣の嵐山町、東松山市、滑川町の各社協と協働して福祉教育を推進する「ふくふく木曜会（以下、ふく木）」を構成しています。福祉教育の広がりに限界を感じていた町社協は、ふく木への加入によって、その内容が大きく変化したそうです。月に一度の定例会は顔ぶれも多様で、各社協の職員以外に、地域のボランティアや障害のある方なども参加します。単独の町だけでは、当事者やボランティアの協力には限界がありますが、市町を超えた連携により、展開できるプログラムが共有でき、実践が広がります。また情報共有や学び合いにより、導入授業などベースとなっている5つのプログラムの他に、新たなプログラムの開発にもつながっています。毎月1回の定

例会のなかで、目的や内容のすり合わせとともに、各プログラム等についてのリフレクションの場になっています。

一場さんは「めざす方向が皆同じなので、意見交換も活発でポジティブです。また、障害のある人も参加しやすい環境を整えることが定着しているので、定例会自体が『小さな共生社会』としての学び場になっています」と語ります。地域の社会資源を活かすこと、障害の有無に関わらずお互いをわかろうとすることが豊かな福祉教育につながるなど、ふく木での気づきはかけがえのないものとなっているそうです。

こうしたなか、一場さんは小学校の校長先生から「発達段階に合わせた福祉教育をしたい」との相談を受け、ふく木でのアドバイスを活かしつつ、1年

から6年まで成長に合わせた学びが継続できるプログラムを考えました。例えば、1年生の国語の授業「じどう車くらべ」では福祉車両の紹介、5年生の社会の授業「自然災害」では、避難所に関するワークを通じて障害のある方や高齢者への配慮について話し合います。「当事者とのふれあい、学び合いのなかで、障害のマイナス面（大変、できないこと）だけでなくプラス面（できること、工夫する力）の気づきや生きる力強さ、相手の気持ちになって考えること、多様性を認め合うこと等について、日々、リアルな学びがあります」と一場さん。

今年さらにもうひとつ新たな社協が参画する予定のふく木は、地域を巻き込んだ豊かな福祉感を育むプラットホームとしてますます発展しそうです。

Contents

- P.2▶ **特集** “社協にできる”ボランティア参加を促進するためのヒントを探る！
- P.6▶ **わたしにとってのボランティア**
- P.7▶ **キーパーソンから学ぼう！**
- P.8▶ **災害ソ・ノ・ト・キ！ | インフォメーション**

“社協にできる”ボランティア参加を促進するためのヒントを探る！

今回の特集では、社協のボランティア担当が、地域で新たなボランティア参加を生み出すためのヒントを提供します。

窓口での相談業務におけるボランティアコーディネーションだけではなく、積極的に地域に出向き「顔の見える関係」を構築することで、地域の“隠れた”ニーズの発掘や、地域参加のきっかけづくりにつながった実践を紹介します。

事例 1

▶ 相談業務の見える化に取り組み、業務の質の向上や隠れたニーズの発見を実現。住民の共感を巻き込みながら、個の課題をムーブメントに昇華させ、地域の課題解決につなげる

東京都・練馬区社会福祉協議会



左から
及川さん、田崎さん

練馬区社会福祉協議会

練馬区は東京 23区の北西部に位置する、緑豊かな地域です。人口は 74万人、面積は 23区内で 5番目に広く、アニメの街として知られる大泉学園や、巨大団地群が広がる光が丘など、エリアごとに多様な地域性があります。

練馬区社会福祉協議会(以下、区社協)は、運営する練馬ボランティア・地域福祉推進センター(以下、社協 VC)を、単なるボランティア活動のマッチング拠点ではなく、潜在的な地域課題を発掘する機会創出の場ととらえ、個別相談を起点とした地域課題の解決に取り組んでいます。

練馬ボランティア・地域福祉推進センター 所長 田崎 修司さん

地域福祉コーディネーター ボランティアコーディネーター 主任 及川 智貴さん

地域福祉コーディネーター ボランティアコーディネーター 岡本 朋子さん

社協VCの機能を可視化する 「見える化プロジェクト」

社協VCは、ボランティア、地域福祉、生活支援の3つのコーディネーションを行う複合的な部署です。担当職員20名全員が3種のコーディネーターを兼務しながら、区内4か所に設置された拠点で相談業務にあたっています。部門を分けずに多様な相談の窓口を一本化したスタイルには多くの利点がありますが、守備範囲が広いゆえに「業務内容がわかりにくい」という声が内外から上がっていました。

そこで2019年、社協VCの機能を可視化しつつ改善を図る「見える化プロジェクト」が立ち上りました。まず

着手したのは、相談記録に関する見直しです。1件の相談を、相談者固有の属人的な問題ととらえると、その人への対処で完結してしまいます。しかし個別支援の延長線上に地域支援があり、ひとりの声の多くは、地域課題とつながっています。その視点から生まれたのが、「地域支援カード」です。

例えば難民の方からの相談に対し、



マンガでわかりやすく紹介している「発達性読み書き障害早わかりガイド」

その人の困りごとを解決して終わりではなく、地域支援カードに書き込むことで、難民の現状を地域課題として顕在化させることができます。

「生活相談」の体系化や 事例共有に取り組む

従来は相談内容と対応を記録するだ



「発達性読み書き障害の理解を深めるシンポジウム」の参加者は予想を大幅に超えた

(社福)中央共同募金会「ボラサポ・令和6年能登半島地震」(第2回・第3回)(第2回応募:2月中旬~、第3回応募:4月以降~)

助成金情報

令和6年1月1日に発生した石川県能登地方を震源とする地震により、災害ボランティアセンター等が設置された(または設置が見込まれる)地域において、被災された方々や地域に対する緊急支援活動や復旧のための支援活動、また被災された方々が2次避難をされている地域(全国)での生活支援活動等を行うボランティア団体・NPO等への助成。(詳細は「ボラサポ・令和6年能登半島地震」で検索)

けだった「相談カード」の形式も見直しました。そのひとつが、「生活相談」の細分化です。経済、健康、人間関係、不安感など、約10種の小項目を設け、内容を把握しやすくしました。また、応対した職員の見立てや思いを記入する欄も加えました。及川さんはその理由のひとつとして、「主訴と違うところに根本的な課題があったり、そのことにご本人が気づいていないことが少なくない」と語ります。職員の見解を書き残すことで、相談者をより適切な支援につなぐ可能性が高まります。

事例や情報を共有する仕組みも強化しました。田崎さんの、「私たち職員もそれぞれの個性やバックグラウンドをもつひとりの人間。チームで取り組むことで、一職員の思い込みで対処がかかるよりもわかるように、共有は相談者を多角的に見るうえで非常に重要なプロセスです。

判断に迷う時はひとりでかかえず 仲間に投げかける

そのために欠かせない場が、毎朝行われる「朝会」です。岡本さんは、「ひとりで対応しきれないと思ったら、かかえ込まず朝会で仲間にシェアします。朝会は、長いと1時間近くになることもあります」と語ります。

さらに、より多角的な視点を業務に取り入れることをねらいに、社協VCの運営委員会の機能を充実させました。最近では、「ボランティアをしたい人の性質が変化している」ことに議論が及びました。SNS等を使えば自分でボランティア先を見つけられる時代において、社協VCを訪れる人は「社会復帰の一歩として何かやりたい」など、プラスアルファの事情や理由があるという論点です。人のためではなく自分探しや動機になるケースや、働きながらでもできる単発のボランティア活動への需要も増えています。こうしたニーズの変化を知ることが、単なるボランティアの需給調整ではなく、訪れた相談者の話を丁寧に聞き取るきっかけになりました。

個別相談から生まれた LD(学習障害)支援プロジェクト

ひとりの相談者の声から社会課題に発展したのが、学習障害(LD)のひとつ、発達性読み書き障害(ディスクレシア)についての取り組みです。始まりは2018年、ある母親からの「読み書きが困難な息子の教科書にルビをふるのを手伝ってほしい」という相談でした。応対した岡本さんは、「これは学校が対処すべき範疇ではないか」と考えたものの、母子が本当に困っていることを理由に、支援に着手しました。

一方で、岡本さん自身もディスクレシアを学びたいと考え勉強会を企画したところ、同じ悩みをかかえる保護者とのつながりが生まれ、学習障害について考える会「えるでい」の立ち上げに発展しました。当事者の苦しみを目の当たりにした岡本さんは、「何とかしたいが、学校に働きかけるのは難しい。でも地域の人に広く知ってもらうことならできる」と考えました。東京練馬中央ロータリークラブからの助成金もあり、本格的なプロジェクトとして動き始めました。

コロナ禍で数度のプラン変更を余儀なくされながらも、2022年、マンガでわかる「発達性読み書き障害早わかりガイド」の発行と、区内のホールでのシンポジウムの開催に至りました。シンポジウムの参加申込数は予想を大幅に超え、Zoomでは対応できず急遽You Tubeでの配信となり、会場とオンライン合わせて444名が参加しました。2023年に行われた2度めのシンポジウムでは500人を超えた。そのなかには学校の先生も多数含まれていました。一度は諦めた学校への働きかけを、地域を巻き込む形で実現することができます。



「えるでい～学習障害について考える会～」の話し合いの様子

きたのです。

自由度の高い社協らしさが出せる 部署だからこそ求められる共感力 と想像力

しかし、岡本さんが「入口を広げられたのはいいが、ほかの機関や団体の協力を得なければ、社協VCのリソースだけでは限界がある」と語るように、眞の地域課題として昇華させるには、地域全体で取り組める体制にしていく必要があります。いうまでもなく、地域にはほかにも多くの課題や隠れたニーズが山積しています。限られた条件のなかでも、区社協の理念に「ひとりの不幸も見逃さない」とあるようにひとつとして見過ごすことはできません。

田崎さんは、支援の必要な人にアクセスできる対策として、「こんな相談にも応じられる」と具体的に情報発信することに加え、職員一人ひとりが想像力を働かせることの重要性をあげました。「一例ですが、社協VCでは車いすの貸出を行っているのですが、返却期限を過ぎても返さない人がいます。これを『返してくれなくて困る』ではなく、『なぜ返せないのだろう』と考えることが大切です。私たちは車いすの貸出業者ではなく、その先にある本質的な困りごとにリーチするのが役割だからです」(田崎さん)。

制度に則った事業の運営が多い区社協のなかで、非常に自由度が高いのが社協VCの特徴です。及川さんはほかの部署から異動する際、「社協らしさが出せる部署だね」と送り出されたといいます。できることが無限だからこそ、社協VCには、制度の狭間で救済されにくい難題が舞い込みます。いかに地域の人の共感を巻き込んでいくかが、課題解決の鍵といえそうです。



『発達性読み書き障害
早わかりガイド』(PDF)



『発達性読み書き障害
早わかりガイド』
(YouTube版)

(独)国立青少年教育振興機構「令和6年度子どもゆめ基金助成活動」(2024年6月18日締切)

助成金情報

「子どもゆめ基金」は、未来を担う夢をもった子どもの健全育成を進めるため、民間団体が実施する自然のなかでのキャンプや科学実験教室などの体験活動、絵本の読み聞かせ会などの読書活動などへの助成。(詳細は「子どもゆめ基金」で検索)

事例 2

▶ 閉じこもりがちだった男性高齢者が「ちょいワルじいさん」として元気を取り戻し、自主的に事業に参加。当事者の「気になる」「やりたい」気持ちを引き出す工夫とは

岡山県・奈義町社会福祉協議会



左から
植月さん、小瀧さん

奈義町社会福祉協議会

生活支援コーディネーター 植月 尚子さん

福祉活動専門員 小瀧 功介さん

岡山県東北部に位置する奈義町(人口5,749人／2023年11月時点)は、2002年に住民投票により合併をしない「単独町制」を選択して以降、独自の子育て支援施策を拡充し、行政と地域が協働して子育てしやすい町づくりを進めるなど住民の地域づくりに対する意識が高いことがうかがえます。

こうしたなか、奈義町社会福祉協議会(以下、町社協)では、2017年から男性高齢者の居場所づくり事業として「ちょいワルじいさん作戦会議」を実施しており、県内外から注目を集めています。

男性高齢者が元気になる地域 をめざした研究や企画を実施

奈義町の地域ケア会議で、男性高齢者の閉じこもりが課題として浮上したのは、2008年のことです。当時、町の保健師として勤め、20年以上のキャリアがあった植月さんは、地域の医師や介護事業所職員、ケアマネージャーらとともに、男性高齢者の心理に関する研究を深めました。そのなかで植月さんたちは「男性は女性のように他愛ないおしゃべりだけをしに集まるのは苦手で、明確な目的や役割、遊び心、評価や達成感などが必要」だと学びました。これを踏まえ、男性限定の介護予防教室を企画すると、それまで閉じこもりがちだった男性高齢者が少しずつ参加するようになりました。

この事業には一定の効果がみられたものの、人手が足りず、継続するには至りませんでした。しかし、植月さんが町を定年退職し、奈義町社会福祉協議会(以下、町社協)の嘱託職員として生活支援コーディネーターに着任した2016年、この事業が再び動き出します。町社協は「生活支援サービスの体制整備づくり」を町から受託したことにより、関係者を委員とした「生活支援サービス体制検討

会」を設置しました。この検討会で改めて男性高齢者の閉じこもりが課題としてあがり、かつて取り組んだ男性高齢者向けの事業に改めて注目が集まったのです。

「ちょいワルじいさん作戦会議」 の立ち上げにさまざまな工夫

植月さんは、2016年12月に設置した「男性高齢者居場所づくり検討会」での検討を経て、2017年に男性高齢者が元気になる事業として「ちょいワルじいさん作戦会議(以下、作戦会議)」を立ち上げました。名称には、男性が人生の最期まで少年のような心で「ワル」さをし、良い意味で「ワル」知恵を出し合い、皆で町を元気にしようとの意味が込められています。このユニークな名称を提案したのは、検討会のメンバーで、現在も重要な

キーパーソンのひとりとなっている、俳優で介護福祉士の菅原直樹さんです。菅原さんは2014年に劇団「老いと演劇 OiBokkeShi(オイ・ボッケ・シ)」を設立し、2016年から奈義町に移住して、地域の高齢者らとともに演劇やワークショップを行っています。植月さんと小瀧さんは『作戦会議』という言葉が、しっかりした印象を与えるので、男性の心をつかんでいると思います」と口をそろえます。

名称だけでなく、チラシのビジュアルにもこだわりました。菅原さんの妻でイラストレーターの「あさののい」さんに、独特な趣のあるイラストやロゴを、その都度書き下ろしてもらっています。植月さんは、「先日、役場の20代の女性職員にも『すてきなチラシですね。参加したくなりますね』と言ってもらいました」と笑顔を見せます。



「ちょいワルじいさん作戦会議」と、「ちょいワル同窓会」のユニークな募集チラシ



第1回「ちょいワル GG道場」。ちょいワルじいさんらしいポーズで写真撮影

(一社)あすたむ舎「障がい者支援団体への活動に対する支援事業」(2024年3月末)

障害がある方との地域共生活動に取り組む団体への助成。助成金の支給対象は、社会福祉法人、特定非営利活動法人、認定特定非営利活動法人および3年以上の公益活動を行っている団体。(詳細は「あすたむ舎 助成」で検索)

助成金情報

“じいさん”ならではの企画に多くの同世代が賛同

具体的な活動内容は、作戦会議のメンバーとして登録した60～90代の男性約10人で月1回の会議を開き、地域の男性高齢者が参加したくなるイベントを年1～2回企画し、実施することです。これまで、介助付き日帰り温泉旅行「ちょいワールの旅」、「ちょいワールな囲碁ボール大会」、思い出話で盛り上がる「ちょいワールな同窓会」などのイベントを開催してきました。これまで、地域のサロンやイベントは「女性ばかりが集まるから」と敬遠していた男性たちも、同世代ならではの企画に賛同し「それなら」と腰を上げたそうです。作戦会議のメンバーによる声掛けも功を奏し、イベントの参加者は毎回10～30人と非常に盛況です。

2023年3月からは「ちょいワールGG（ジージー）道場」と称し、男性高齢者が自由に語り合ったり、ちょいワール体操などを行ったりする居場所も開始しました。活動費は、イラストやチラシ、看板作成なども含め、地方創生予算を活用しています。

植月さんは、これらの取り組みの手応えについて次のように語ります。「“じいさん”たちは、地域の役職を降りたことや、家族に車の運転を止められたことで家に閉じこもったり、奥さんを亡くされてひとり暮らしになったことで認知症のようになってしまったりするケースが少なくありません。でも、そんな人たちが作戦会議やイベントに参加するうちに元気を取り戻し、むしろ以前よりも生き生きとしているので



「ちょいワールな同窓会」。出身小学校別に分かれて思い出話を花を咲かせる

はないかと思う人もいます。奈義町は人口が少ないので、ひとりの“じいさん”が元気になっただけでも大きな成果といえます」。

場づくりの工夫で活発な意見が交わされる会議に

作戦会議では、毎回メンバーがお互いを立てつつ活発な意見を交わしています。この雰囲気づくりには、植月さんの経験や工夫が活かされています。植月さんは、「作戦会議の名称やイラストにも通じることですが、参加者が『気になる』『行きたくなる』『やりたくなる』表現や雰囲気づくりがとても重要です」と語ります。「例えば、作戦会議のあいさつも、用意した原稿を読むように『よろしくお願ひします』と言うのと、『楽しい会にしましょう！』『奈義町を素晴らしい町にしましょう！』と盛り上げたり、夢を語ったりするのとでは、参加者の気持ちの乗り方が違います」と植月さんは説明します。さらに、参加者から出た意見を誰も否定しない会議にすることも、発言しやすい雰囲気づくりにつながっているといいます。

行動変容を促す伝え方で「やりたい」を引き出す

植月さんが、こうした場づくりや参加者の気持ちづくりについて学んだのは、保健師を務めていた三十代の頃のことです。植月さんは当時、糖尿病予防教室などを企画しても次第に住民が参加しなくなったり、保健指導をしてもなかなか住民に実践してもらえないなったりすることに悩んでいました。そんな時に出会ったのが「健康学習（※）」と呼ばれる理論です。これは、当事者に医学的な課題からアプローチするのではなく、本人の夢や楽しみを実現するために何が必要かについて、ともに考えることで、健康づくりへの自主性を育むというものです。「例えば、『食事制限をして運動をしないと糖尿病に

なって、合併症で失明するかもしれない』と指導するのではなく、『残りの人生をどう生きたいか』などを聞くのです。すると『ハワイに行きたい』『グラウンドゴルフを続けたい』など、いろいろな思いが出てきます。それを実現するために『食事に気をつけましょう』といった話をするのです。本人が『やりたい』と思わなければ、行動変容は促せません。作戦会議も同じで、私たちが押し付けるのではなく“じいさん”たちの『やりたい』を引き出す場づくりを大事にしています」（植月さん）。

小瀧さんが「植月さんは場づくりのプロフェッショナル」と称賛すると、植月さんは「私も何十年も失敗を重ね、試行錯誤してきたのです」と返します。そして植月さんは、この事業が成功している背景には、単独町政を選択した地域性、それにより、植月さんが保健師として四十数年にわたり、同じ顔ぶれの住民と家族同然の関係を築けたこと、さらに菅原さんのような応援団の存在など、多くの要因があるといいます。その意味では、他の社協が奈義町とまったく同じ事業を実践するのは難しい面があるかもしれません。しかし、住民と顔の見える関係を築くことや、やる気を引き出す工夫、発言しやすい場づくりなどは、地域が違っても取り組めることです。できるところから着手し、男性高齢者が元気になる地域づくりにつなげたいものです。

（※）医師の石川雄一さんがハーバード大学で行動科学などを研究したうえで確立した、魅力的な健康事業を実現するための理論



第2回・3回「ちょいワール GG 道場」では、皆でちょいワール体操を考えた。「大きな大きな那岐の山」

全国ボランティア活性化プロジェクト実行委員会「第6回全国学生ボランティアフォーラム」 (2024年3月22日・23日・24日@国立オリンピック記念青少年総合センター)

年に1度、全国からボランティアに関わっている学生が集まり、泊まりがけでとことんボランティアや自分の活動について語り合う合宿研修型のプログラム。「ボランティアっていいよね」を理念に掲げている。（詳細は「全国学生ボランティアフォーラム」で検索）

わたしにとてのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協VCが若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。

新潟県
第11回 新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
ボランティアセンター
学生ボランティアコーディネーター(通称:ぼらくと)



新潟青陵大学福祉心理学部4年
なかざわ あやの
中澤 彩乃さん

団体紹介

学内のボランティアセンターに属する、学生ボランティアコーディネーター団体。サークルではなく直属の学生スタッフという立場で、学生のボランティア活動の支援や、情報の発信を担う。約50名の学生がスタッフとして活動中。

学生の視点で「楽しい」を入口に ボランティアの魅力を発信し、仲間づくりに取り組む

「ぼらくと」のスタッフになろうと思った理由は?

祖父母と一緒に暮らしていることもあって、私にとって介護や福祉はごく身近なテーマでした。高校では生徒会に所属し、祭りや廃品回収など地域の活動を通して地域福祉にもふれました。ただし漠然とした関心に過ぎなかったので、高校生の時には進路を決めきれず、大学で4年間学ぶ間に、自分の道を見つけることにしました。新潟青陵大学への進学が決まり「ぼらくと」の存在を知って、「ここに入ればボランティアに深く携われる」と思い、迷わず所属しました。

ボランティアを「したい」学生と「来てほしい」依頼者とをつなぐのが、私たちコーディネーターの役割です。「このイベントに参加するとこんな楽しみがあ

るよ」と背中を押したり、学業との両立についてアドバイスするなど、同じ学生の立場からサポートできるのが、私たちの強みです。スタッフとして運営側に回ることで、大きなイベント等に企画準備段階から参加できたり、活動を通じてビジネスマナーを覚えたり、ふだんの学生生活では得られない学びをたくさん経験させてもらっています。

学生ボランティアコーディネーターの魅力はどのような点にある?

ボランティアの楽しさを、多くの人に伝えたいと思っています。私たちの呼びかけをきっかけに初めてボランティアに参加してくれた学生が、楽しいと感じてくれたり、その後も継続して活動に参加してくれるとうれしいです。もちろん、誰もが興味を示してくれるわけではありません。一度でも体験してもらいたら、きっと楽しさを理解してくれると思うのですが、どうやってそこまでこぎつけるかが課題です。ひとりで参加することに躊躇している人には「私も参加するから一緒に行こう」と声をかけたり、どんなふうに楽しいのか、私自身の体験を飾らない言葉で率直に伝えてみたり、いろいろ工夫をしています。



オープンキャンパスで、ぼらくとメンバーが高校生に向けて活動説明しているようす

ボランティア人財が不足している社会の現状をどう思う?

ボランティアをする人、しない人がはっきり分かれているなと感じます。就職活動や単位取得のために、その間だけするという人もいます。社会人になると忙しさにまかせて、次第に活動から遠ざかる人も多いと聞きました。でも、ボランティアは本来、そんな大仰なものではありません。「人のために何かしたい」という気持ちの延長線で、気軽に取り組める仕組みがあるといいですね。気がかりなのは、内容はそっちのけで、ただ「ボランティア=すごい、えらい」という価値観がひとり歩きしていることです。ボランティアがやや過大評価されていると感じます。

私は「ぼらくと」に所属したおかげで、介護の道に進む決心ができました。この4年間にボランティアで学んだ経験を大切に、4月からは介護士として働きます。

社協VCが若者とつながるには?

まず社協を知ってもらうことが大切ではないでしょうか。役割としては黒子かもしれません、組織としてはその存在を知ってもらう必要があります。知ってもらう取り組みを学生と一緒にに行う、というのもいいかもしれませんね。

社会福祉法人 新潟県社会福祉協議会
地域福祉課 安達 勝彦さん

イベント情報

「広がれボランティアの輪」連絡会議 国際プロジェクトチーム・第3回連続勉強会 「『いまさら聞けない! 地域de多文化共生』～外国にルーツを持つ子どもたちが自らのポテンシャルを十分に活かせる社会へ～」(2024年3月下旬@オンライン)
外国にルーツのある若者をゲストに迎え、自身のライフストーリーや活動内容をうかがう。多様な文化的バックグラウンドや経験をもつ、外国ルーツの若者たちが自らのもつ可能性や能力を十分に發揮できるような社会を作っていくために、自分たちに何ができるかについて考える。(詳細は「広がれボランティアの輪」で検索)

キーパーソンから 学ぼう!



お互いにつながる はじめの一歩

人と人とのネットワークをつなげながら、人々の生活に直結するさまざまな困りごとにアプローチをしているキーパーソンを紹介します。

さまざまな分野のキーパーソンから協働のヒントを探り、読者の皆さんもはじめの一歩を踏み出しましょう！

第11回

企業社員の力を活かし 社会をもっと元気にしたい!!



東京都

日本フィランソロピー協会 シニアマネージャー/
NECプロボノ俱楽部 顧問／一般社団法人Nボノ 代表理事
かわもと ふみと
川本 文人さん

日本電気株式会社(NEC)社員として2020年にコロナ禍で困窮する団体に対応すべく「NECプロボノ俱楽部」を設立。“自分に活かす仕事につながる”プロボノ^(注)を推進。2023年に退職し、日本フィランソロピー協会シニアマネージャーに就任し現在に至る。

(注) 職業上のスキルや経験を生かして取り組む社会貢献活動

仕事を通じて見えた社会課題が プロボノ組織の発足につながりました

情報通信機器メーカーに勤め、ICTによるまちづくり（スマートシティー）や行政のDX推進などの事業部門を担当していた時、行政や地域の社会課題を目の当たりにして、ICTだけでは解決できない問題が多くあると感じました。また、個人としても地域でトライアスロンやパラスポーツの競技運営や普及活動に携わっている立場から、コロナ禍にあって困窮する現場のサポートに、自身のもつ知見やノウハウが役立てられるのではないかと思い至りました。

そこで、社内にプロボノ活動支援チームを立ち上げたのです。まず、社内で有志を募りプロボノワーカーの登録データベースを作成。具体的な活動にあたっては以前から関わりのあった川崎市社協の協力を得て、同地区のさまざまな団体とつながり、要請に応じてチームを組織するかたちで、2020年から約3年間で50を超える案件を支援しました。そのなかには活動が地域に定着し、継続的なイベントになったり、より規模の大きな支援事業へと発展したものもあります。

地域社会との関わりなくして 企業活動は成り立ちません

プロボノは支援を受ける側だけでは

く、参加する社員や送り出す企業にも得るものが多い活動です。近年は大手企業を中心に、地域社会との共創による社会課題の解決に向けた機運が高まっており、地域との関わりなくして企業活動は成り立たないと考える企業が増えています。CSR（社会的責任）という侧面だけでなく、実際に社会に求められる製品・サービスを提供するうえで、課題の現場を実体験として理解することは非常に有意義です。外からでは見えない構造的な問題や、その背景を知ることで改善のヒントを得たり、持ち帰った知見が実際の業務に役立ったという声も多く聞かれます。

そのため、プロボノ活動を社員の成長・学習の機会ととらえて積極的に参加を推薦する企業も少なくありません。全国の社協の皆さんにも、こうした企業側の思いや、もっと社会に役立ちたいという起業人が大勢いることを知っていただけたんですね。

地域・企業・社協がつながる プロボノ活動の輪を広げていきます

企業も地域社会への貢献を模索していますが、なかなか接点が見いだせないことが多いのも実情です。企業と地域の壁をなくし、お互いにフラットな立場で課題解決に向き合える“共創の場”をもっと増やしていく必要があります。その一



遠隔地からボッチャに参加。
学生とロボット開発で共生社会実現をめざす

助を担うべく、会社を退職した現在は日本フィランソロピー協会で、企業と地域をつなぐボランティア・プロボノ支援のマッチング事業に従事しています。

これまでの活動を通じて「小さな実績の積み重ねが社会を変える大きな力になっていく」のだと実感しています。私自身困っている人（団体）と支援したい人をつなぐネットワーク活動が大好きです。それぞれの思いや願いを結びつけることで、大きな価値となる課題解決につながります。

“人と人をつなぐ”支援活動で、新たな価値の創造や社会課題解決、まちづくりに発展していくワクワク感が、この活動を進める原動力になっています。活動に係るそれぞれが、さまざまな気づき、学び、喜びを実感することができます。この感動を皆さんと分かち合うためにも、企業社員のプロボノ活動をさらに盛り上げ、その輪を全国へと広げていきたいです。

『月刊福祉』2024年3月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

書籍紹介

特集は「共に生きる力」を育む。孤独・孤立問題が起こらない社会につなげるための「共に生きる力」を育む福祉教育プログラムのあり方について提起する。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

災害ソノトキ!

～災害時の連携に向けて、
平時から考えたい協働の視点～

第11回 岡山県 岡山県社会福祉協議会

切れぬのない支援に向けて 県社協として新たな取り組みを推進



岡山県社会福祉協議会
地域福祉部 地域支援班
主任
たちばなてつや
橋 哲也さん

岡山県で発生した災害の支援活動で見えた課題

平成30年7月豪雨の被害により、岡山県に9市1町で災害ボランティアセンター（以下、災害VC）が開設されました。岡山県社会福祉協議会（以下、県社協）では、被災者支援（災害VC、災害派遣福祉チーム（DWAT）、被災者見守り・相談支援等事業）を通して次の課題を認識しました。第1に災害VC運営期から被災者のニーズを把握し、多業種・多分野との連携と協働により支援をしていく視点が必要であることです。被災者には心身の健康や家屋被害、人とのつながりの途絶などのさまざまな影響があることから、生活再建に向けたニーズは多様であり、発災当初から時間の経過とともに変化していきます。第2に、被災者の生活場所も移っていくため、支援者同士の情報のつなぎも必要と考えました。

新たに「災害ボランティア・復興支援センター」を推進

こうした課題を踏まえ、県社協では今年度から令和9年度までの5か年計画「第8次経営・活動計画」のなかで、県内の各社協に「災害ボランティア・復興支援センター」の考え方を推進することにしました。これは、災害VCに見守り支援や相談支援の機能を付加するもので、多分野・多業種との協働により被災者支援



市町村社協災害支援担当者会議の様子

を展開したいです。このような支援を災害時に円滑に展開できるように、県社協においては市町村域・県域の支援者と平常時から、協

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携、協働が必要不可欠です。

本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

働できる仕組みを構築することが大切と考えました。

県内の各社協に4つの協働の仕組みを推進

県社協では、各社協における災害時の協働を強化するため、次の仕組みを推進します。ひとつめは、地区社協やJC、生協、地元企業などとの協働型災害VCの運営です。ふたつめは、社会福祉法人、福祉専門職、民生委員・児童委員、保健師、DWATなどと協働し、災害により困難をかかえた方を早期に把握し支援につなげる仕組みです。3つめは、被災者見守り・相談支援に関わる協働です。時間の経過とともに変化する被災者の多様なニーズに対し、必要なタイミングで支援を届けられるよう、民生委員・児童委員や保健師、行政担当者、NPO、土業などとの協働が欠かせません。4つめは、資源が不足した場合に備え、近隣の市町村社協と協働する仕組みです。これは、被災者が住まいを他の市町村に移動した際、情報や支援をつなぐうえでも重要です。

新たに県域のネットワークによる連携・協働の強化を

災害時にも切れぬ地域住民を支援するためには、市町村社協を支援する県域からの後方支援も大切です。そこで、今年度から社協における災害時の協働を推進する県域のネットワーク会議や県域の支援者向けの研修を開催しました。平成30年7月豪雨災害における被災者支援にて協働した福祉分野や土業等団体、民間団体、県行政等といった県域の多様な機関・団体に参加いただきました。平常時からの事業を通じて、市域・県域において多様な支援者が協働できるよう推進したいです。

【インフォメーション】「ボランティア全国フォーラム2024」を開催します

～ボランティアの仲間たちと仙台で会いましょう!～（「広がれボランティアの輪」連絡会議）

【参加費】全日参加：5,000円

1日のみ参加(1日目・2日目どちらかのみ参加):3,000円

オンライン参加(1日目のみ):5,000円

※学生の参加費は無料

詳細・申込は、「広がれボランティアの輪」連絡会議ホームページでご案内します。

「広がれボランティアの輪」で検索 <https://www.hirogare.net/>